

आयुस: あーゆす

〈発行〉 京都文教短期大学図書館／京都府宇治市槇島町千足80

〈聴く〉の重要性

図書館長・教授 照屋敏勝

われわれは誰でも〈聴く〉ことができると思っている。しかし、〈聴く〉という行為はそんなに簡単なことではない。おしゃべりしながら聞く、テレビ見ながら聞く、よそ見しながら聞く。何でもないことのように思える。しかし、それはほんとうの〈聴く〉ではないからである。〈聞く〉と〈聴く〉は基本的に違う。〈聞く〉は一般的にどういうばあいでも使えるが、〈聴く〉は問題意識や課題意識をもって、心を集中して注意深く聴くばあいの言葉である。〈聴〉という字は「耳」と「目」と「心」で構成されている。大きな耳になっているのは多く聴くためであり、一つも聴きのがさないためである。御仏の耳が大きいのもそのためである。話す人の目をまっすぐ見て聴くので、「目」という字も入っている。

ミヒヤエル・エンデの『モモ』は現代児童文学の傑作の一つであるが、われわれに〈聴く〉重要性を教えている。モモは見かけはいささか異様で、きみょうなかつこうをした不思議な少女であるが、すぐれた聴く力をもっている。

モモは現代の聖(ひじり)であり、カウンセラーであるともいえる。両者とも徹底して他者の話を聴く人である。「聖」は「耳」を「呈」という字になっている。つまり自分の耳を相手に差し出すということである。人々の悩みや苦しみや悲しみを徹底して聴くためである。

「小さなモモにできたこと、それはほかでもあ

りません、あいての話を聞くことでした。なあんだ、そんなこと、とみなさんは言うでしょうね。話を聞くなんで、だれにだってできるじゃないかって。でもそれはまちがいです。ほんとうに聞くことのできる人は、めったにいないものです。そしてこの点でモモは、それこそほかには例のないすばらしい才能を持っていたのです。

モモに話を聞いてもらっていると、ばかな人にもきゅうにまともな考えがうかんできます。モモがそういう考えを引き出すようなことを言ったり質問したりした、というわけではないのです。彼女はただじっとすわって、注意ぶかく聞いているだけです。その大きな黒い目は、あいてをじっと見つめています。するとあいてには、じぶんのどこにそんなものがひそんでいたかとおどろくような考えが、すうっとうかびあがってくるのです。」

モモは聴く人である。「モモのところに行ってごらん！」が人々のきまり文句になっていた。エンデがモモにすぐれた聴く力を与えたのは、現代人の聴く力が衰弱してきていると考えたからである。特別の力ではなく、誰もが持っている能力を顕在化させたのである。

現在の子どもたちの不幸の一つは、子どものまわりに子どもの話をほんとうに聴く人がいなくなっているということと、子どもたちのなかに人の話を聴く力が十分に育てられていないということである。

西洋音楽との出会い

助教授 伊藤和男 (イギリス文学)

私にとって西洋音楽との出会いは、西洋の文化全体との出会いとも言うべき重要な性格を持っているように思える。始めてメンデルスゾーンの『バイオリン協奏曲』、ベートーヴェンのピアノ協奏曲『皇帝』を聴いた時、私にとって全く未知の世界が眼前にあらわれたのである。その完成された美の世界に心から酔いしれ、深い感動を味わうことが出来た。ベートーヴェンのことを知りたくてロマン・ロランの『ジャン・クリストフ』や『ベートーヴェンの生涯』などを読み出し、「更に美しいためには、破り得ぬ規則は1つもない。」という言葉や、「苦悩を通じて歓喜を」という信条告白に心引かれた。「空気は我々の周りに重い。…偉大さの無い物質主義が人々の考えにのしかかり…世界が、その分別臭くてさもしい利己主義に浸って窒息して死にかかっている。…もう1度窓を開けよう。…英雄たちの息吹を吸おうではないか。」という『ベートーヴェンの生涯』の序文に書かれたロランの言葉が学生の頃の私に深い感銘を与えた。更に、「人生というものは、苦悩の中においてこそ最も偉大で実り多くかつ又最も幸福でもある…」という荘重でなぐさめに満ちた言葉が今でも忘れられない。

ベートーヴェンの作品を聴き始めて少ししてモーツァルトの『ピアノ協奏曲第27番』に出会った。ここに表現されたモーツァルトの天上の歌、そして彼の「白鳥の歌」とも呼ばれる澄み切ったピアノの音に心が洗われ、この世のすべて善きものへの信頼を人に与えうる作品だと感じ、他のモーツァルトのピアノ協奏曲をすべて聴いてみた。彼の他の作品に時々感じられる何かしら退廃的なふん囲気がなく、私は今でもすべて大好きな作品で、何度もよく聴いている。

次にピアノ音楽に興味を持ち出した私に、あの天才ピアニスト、グレン・グールドのレコードとの出会いがあった。特にヨハン・セヴァスチャン・バッハのような重々しい音楽と思いこんでいたの

を、更にさわやかな独特のタッチで見事に現代人のためのバッハにしてしまっている所などに心引かれたものである。『フランス組曲』、『イギリス組曲』など愛らしく快い音楽に接することの幸せを感じていた。

私がロンドンを訪れる時、何度かバレエ『白鳥の湖』の公演をテムズ河畔のロイヤル・フェスティバルホールなどで見る機会があり、自然とチャイコスキーの感傷的とも言うべき世界に次々と引きこまれて行った。『第5交響曲』は今でも特に気に入っている作品である。ロンドン・パリー・ニューヨークなどで音楽を生で聴く機会があると、西洋の人々が日常生活の中でこれらのすばらしい音楽をいかに愛好し、彼らの大切な文化として守り育てているか、その姿に心うたれ、うらやましくも感じられるのである。

さて、あのリヒャルト・ワーグナーのことを忘れてはならない。『さまよえるオランダ人』、『タンホイザー』、『ローエングリン』が私の好きな3つの作品である。後年の大作よりも比較的若い時代のこれらの作品の方が私の心に訴えるものを持っている。特に『ローエングリン』が提示する世界は、我々が日常性の中で完全に忘れ去ってしまっているような、高貴さ、崇高さ、荘重さ、そしてドイツ的とも言うべき何かを全編を通して聴く者に浸透させていく力はまさに音楽の持つ魅力とも言えよう。

最近パリのシャンゼリゼ劇場で私が初めて聴いたサンサーンスの『バイオリン協奏曲第3番』は実にやさしく甘い音楽であり、このような繊細で色彩感のあるフランス音楽と出会うことが出来たことに感謝している。西洋音楽との出会いはこれからも続いていくことであろうが、私にとって、それは西洋文化との大切な、楽しく快い出会いであり、永遠の美の世界との出会いであってほしいのである。

＊ 私のすすめる 3冊 ＊

助教授 森川知史(国語学)

1

『人生の習慣』

大江健三郎；岩波書店

本の書き手がいつも全人格を懸けて書いている訳ではないし、作家の仕事がそういうものである必要は必ずしもない。ただ、子供の誕生以後の大江に、そのような姿勢を強く感じるのには私独りだろうか？

大江の講演集だが、著者が生れ育った土地の影響という根元的なことから、読むこと、書くことの意味が問題にされる。「人生の習慣」は最後に置かれた講演のタイトルだが、ここでは「生き方」に言及している。

2

『声の文化と文字の文化』

W-J・オング；藤原書店

我々は最早、文字のない世界というものを想像できない。本書は、文字を知らない文化と、文字を知って以後の文化とでは根本的な違いがあると指摘する。現在の我々の話は、文字に慣れた者のものであって、書く技術が人間の意識にもたらした影響から離れられないという。

「人間とはこういうものだ」と我々が信じ込んでいる多くの特徴が、実は文字というものの出現によって変容したものであるなら、我々の認識の多くを改めなければならぬのかもしれないと考え込まされる。

3

『「私」は脳のどこにいるのか』

澤口俊之；筑摩書房

脳科学者である著者の立場から、自我の脳内メカニズムを説き明かそうとする。「自分とは何か？」という問いに哲学的にではなく、科学的に応えようとするユニークな一冊である。人格や理性や自我が損なわれた事例などをふんだんに示しながら考察は進められる。

「自分って何なのか？」との思いに捕らわれてしまう。

お母さんの木

5年 皆川綾子

こんなに苦しくて、
こんな悲しい話は、
もういやです。

子どもが兵隊にとられるたびに、
一本ずつのきりの木を植える。
一本植えるごとに悲しみや思い出も
一本ずつふえる。

子どもが7人もいたのに、
ごはんをたべるのも一人、
話し相手もなく

一人さびしく、くらすお母さん。
葉っぱをだいて、

「一人だけでいいに、
一人だけでいいに……。」
と願ったお母さん。

その願いが通じて、
せっかく一人だけ帰ってきたのに、
お母さんは、一人さびしく死んでいたので。

こんな苦しくて、
こんな悲しい話は、
もういやです。

大川悦生作 『おかあさんの木』
(ポプラ社)

『沈黙をやぶって』を読んで

生活科学専攻2回生 小林 千寿子

「沈黙」、重みを感じる言葉だ。「生活科学研究」(ゼミ)のテーマに悩んでいた私に金井朋子先生が勧めてくれた本の中の一冊だった。題名から内容は読みとれなかったが、「沈黙」という言葉にひかれるまま読み始めた。

この本には、いままで公の場ではほとんど語られることもなく、認められることもなかった「子どもへの性暴力」を証言し、告発する22人の女性達の声が綴られている。女性達はまだ幼児や少女のころ、近親者や知人やあるいは、知らない相手から受けた性暴力の体験を何年、何十年と経ってから告白している。その間、ずっと誰にも打ち明けていない人達がほとんどである。それは加害者に口止めされたり、言わないほうがよいと自分自身で思っているなどの理由からである。なかには、助けを求め、打ち明けた母親にさえ「誰にも言うてはいけない」と拒否されている女性もいた。私は、読み始めてすぐ、胸が痛くなり張り裂けそうな思いに駆られた。女性達の体験は、私が今までテレビ、映画、新聞などのマスメディアを通して知っていた性暴力の実態をはるかに超えていた。この本の中の「叔父」という題名で告白している女性は2、3歳ぐらいから父親の弟、つまり彼女にとって叔父に当たる人から性暴力を受け始め、それは中学2年まで続いた。

後になって、彼女は父親の血統には先祖代々父親が自分の娘を強姦するという近親姦が多かったようだと知った。私はこの叔父に当たる人は性暴力が悪いことと分かっていなくて、先祖代々受け継がれ、日常的な当たり前のことと思っているような気がする。彼女の告白を含め、この本の女性達は、まだ何も知らない抵抗もできない少女だったころ、加害者から体だけでなく、心にも深い傷

を受けている。彼女達の気持ちは同じ体験をした人達にしか分からないだろう。しかし、私は少しでも理解したいと思い、更に読み進めた。衝撃的だったのは「バナナ」という題名の告白である。その女性は、幼児のころに知らない相手から一度だけ性暴力を受けた。そのたった一度の幼児体験に生涯苦しんできた老女は、「いま初めて文字にして70余年秘めた胸の傷が涙と共に溶けてゆく」と言う。この言葉が私の心に強く残る。これらの体験を綴った女性達は、みんな晴れやかに人生を生きたいからあえて辛い体験を告白し、過去と向きあい、また現実を多くの人に訴えているのだと思う。「沈黙のままがいい」などということはなく「沈黙を破ること」こそが大事なのだということを学んだ。

今まで私は、実際にあるのかと信じることができなかった「性暴力」についてこの本を読み、現実を受けとめられるようになったし、被害者の立場から物事を見て、解決策を考えていくべきだと思った。この本は私に辛く困難な事に対して逃げずに受け止め、誠実に向き合うことが大切だと教えてくれた。これからは私も、性暴力の被害を受けた人達をより深く理解し、心の傷を癒すことのできる側になりたいと思うようになった。この本の後半には、心身の傷を癒すために世界の各地で行われている癒しの儀式や心の傷の癒し方などが書かれている。日本ではまだ少ないが性暴力に取り組むグループや子供の虐待防止センターなどがある。私もこのグループセンターに関わっていきたいと思う。この本は、私にそのきっかけを与えてくれたのだった。

『沈黙をやぶって』 編著 森田ゆり 築地書館